

広島俳句倶楽部

令和五年八月作品集

壬申の乱 佐保 光俊

壬申の乱(六七二年)とは、天智天皇の皇子大友皇子と天智の実弟大海人皇子(のちの天武天皇。以下「天武」と記述する)とが、天智死後の皇位継承をめぐる戦った古代日本最大の内乱である。結果は天武側が勝ち、大友は自殺した。

天智による理不尽な処遇と身に迫る危険からやむなく天武が壬申の乱に及んだとする通説に對し、一石を投じる本(倉本一宏「壬申の乱」)を読んだ。それによると、天智は本意で天武に皇位を継がせようと思っていたのであり、わが子草壁皇子に皇位を継がせることを目論んだ膳野皇女(のちの持統天皇)が主体的に壬申の乱を計画したとする。特に興味深かったのは、壬申の乱では、天武側がいち早く不破道を塞ぎ、大友の率いる近江朝廷側の東国での兵の徴発を封じ込めたことと、天武の動きに呼応して尾張国司が二万の兵を率いて天武に帰属したことが、乱の大きな勝因とされているのだが、実はこの兵は、白村江(六六三年)の敗戦の代償を求めて日本を訪れた唐の官吏郭務悌の要請に応じるために、尾張国司が対新羅戦に向けて兵を徴発し、近江朝廷に届けようとしていたものを天武側が接収したものだとする。ちなみに、日本書紀によると、天武はこの国司を褒めているのだが、その後国司は自殺し、天武は、なんて死んだのだろうかと言ったという。こうした相反する説のある壬申の乱の舞台となった地を歩いた時の句を中心に、既発表句・未発表句を合わせて特別作品「壬申の乱」として纏めた。

大海人一行は、小関越を通過して大津宮から吉野宮へ向かったであろうという

小関越三光鳥のよく鳴いて

一旦、吉野宮に退いた大海人は、機を見計らって参兵する

磐石に立ちて吉野の滝を見る

大海人の湯沐邑(ゆのむら、領地)のあった美濃(向かう道筋の最大の難所加太越(かぶとこえ)) 鈴鹿山脈南嶺南の断層帯に位置する峠

鶴の騒ぐ木を過ぎ加太越

鈴鹿山脈の東側を北上して美濃に到着した大海人は、現関ヶ原町野上に行宮(仮宮)を置いて指揮を執ったという

行宮へ踏み分けて行く夏の草

大友軍は、和斐(わぎみ)に布陣した大海人軍に至倉部邑で奇襲をかけたが撃退されたという。その地を流れる藤古川は、兵たちの血で染まったことであろう

いくつかは藤古川へと実梅落つ

大海人軍は北と南から大津宮への進攻を開始した北側の近江路戦線的主力軍同士の激突の地は息長横河現米原市梓河内あたりであろうという。清らかな梓川の流れの傍には、地蔵が寄せ置かれていた

川涼し山また涼し地蔵はも

梓川澄んで戦を忘れめや

南側の大和・河内戦線は、飛鳥京を制圧した大海人軍とこれを奪還しようとする大友軍が、乃樂山と衛我河(現石川)・大和川合流点あたりで会戦した

ここもまた戦ひの地か豆咲いて

天武は、壬申の乱の後、第二の天武の出現を防ぐために不破関を設けた。関の跡地に立つと、足下から藤古川を渡って近江へと続く不破道が伸びている

去りがたき夏風に立ち不破関

長等山前陵(伝弘文天皇陵) 天武の指示で編纂された日本書紀は大友皇子の天皇即位を認めておらず、大友は明治時代になってようやく弘文天皇と追認された

みささぎの道に懸かりて烏瓜

壬申の乱に勝利した大海人は、自らを神と称して皇位に就き、皇親政略を行った専制君主天武と次の持統の元で、律令体制が完成する

壬申の乱に問ふもの夏灯

伝弘文天皇陵から西に山を隔てたところに御廟野古墳(天智天皇山科陵)がある天智はあの世から壬申の乱をどのように見ていたであろう

陵に大づもり雪の降る

和斐(わぎみ)は関ヶ原の古名である

壬申の乱から九百数十年後、再びこの地で天下を二分した関ヶ原の戦いが起きる

和斐とふ関ヶ原とふ夏野かな

《作品鑑賞》

村上正人

ことばによって時間と空間を飛び越えることができるのは、生き物の中で人間だけが与えられた数知であると言ふ人もいるが、佐保光俊先生は作品の中でそれを我々に体験させてくださる。ご自身の足で実際にその地を訪れ、最新の歴史解釈を織り交ぜ、大きなスケールでドラマティックに表現された句に、我々の想像力は掻き立てられる。

鶴の騒ぐ木を過ぎ加太越

「鶴の騒ぐ」ではなく「鶴の騒ぐ」という表現が、峠を越え、やがて始まる皇位継承の激しい戦いを暗示しているようだ。

去りがたき夏風に立ち不破関

戦いには勝利したものの、後に再びその地位を狙う者が現れるかもしれないという天武の安らかではない心持ちに思いを馳せつつ、不破の関の跡地に立つと、何やら去りがたい気持ちにさせる夏風が吹いていた。

みささぎの道に懸かりて鳥瓜

佐保先生の記述にもある通り、明治三年になってようやく大友皇子は弘文天皇と追諡され、約七か月の短期ではあるが、第三十九代の在位と公になったようだ。道に懸かる鳥瓜が、その陵の主と伝えられる御方の哀れを感じさせる。

陵に大つごもりの雪の降る

この句の「大つごもり」を大晦日と解釈すると、やがて新しい年が明ける（旧時代の変革）とも思えたが、つごもる（11月が籠る）から、陵に眠る天智天皇のことを暗示しているのかもしれないと思えた。些末な解釈はさて置き、陵に「雪の降る」その景を想像するだけで、心に沁みる。

和盤とふ関ヶ原とふ夏野かな

同じ原を壬申の乱の頃には「和盤」と呼び、関ヶ原の合戦の頃には「関ヶ原」と呼ぶという内容であるが、そこで繰り広げられた戦を思い起こすとき、『夏野』という季語がとても相応しく感じる。夏草が青々と息吹いている原に、かつては多くの兵が血を流し斃れていったという命のありさまを感じるのである。

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

壬申の乱。その時代の人と現代人とは異なると考えていたが、人の心は変わらないのだと感じた。我が子を天皇にしたいがために戦を仕組んだ母。他者にまた攻められることを恐れていた勝者。千三百五十年を経て、変わらぬ人の心のダイナミズムを感じながら、たつぷりと読ませていただいた。

小関越三光鳥のよく鳴いて

「月、日、星、ホイホイホイ」と鳴く三光鳥。大海人皇子もこれを聞き、我こそは月であり日であり星である、と思いつながら吉野へ下ったのであろうか。

去りがたき夏風に立ち不破関

自らを神と称し国を支配した天武天皇が不破関を作らせた。勝者もまた誰かに破られることに怯えながら生きる。折から吹く夏風に離れたい思いが湧いてくる。

川涼し山また涼し地蔵はも

梓川澄んで戦を忘れめや

大友皇子、大海人皇子の両軍が激突した地。梓川は清らかで、ただ、地蔵が置かれている。この地蔵に多くの人が折ったことだろう。今は戦などなかったかのようだが、だが、忘れることなどあるはずがない。

和盤とふ関ヶ原とふ夏野かな

壬申の乱と関ヶ原の合戦。その二つの大きな戦いの場であった地は、今ただ草の生い茂る夏野だ。芭蕉の「夏草や兵どもが夢の跡」を思わずにはおれない。

《作品鑑賞》

亜矢

まず、作者の歴史に対する造詣が深く、且つ旺盛な探究心をお持ちであることに敬意を表します。実は、私は学校で習った歴史さえもあまり覚えておらず、これまで特別な関心を抱いてきませんでした。従って、「壬申の乱」にでてくる固有名詞や季語が、句の中でどう生かされているのか、俯瞰するような目で鑑賞することになりました。

小関越三光鳥のよく鳴いて

鬱蒼とした緑に三光鳥の澄んだ鳴き声。色合いと長い尾も相まって、小関越が効いていると思う。作者の姿も見えよう。

こもまたまた戦ひの地か豆咲いて

豆は、古くはそら豆を指していた。日本へ渡来したのは七三六年とされるので、壬申の乱以降である。繰り返されてきた争いに思いをはせる作者。豆の花は、現代の平和の象徴か。

和盤とふ関ヶ原とふ夏野かな

名称が変わっても、同じ夏野であることに変わりはない。現代にも通じる世の中の哀しみが根底にある。

摂津より河内より吉備暑きかな

峰雲や吉備分割のこと思ふ

鉄産みし山から吹いて夏の風

前方も後円も飛び鬼やんま

葦石の散らばり残る夏木立

大鯉の姿隠せし夏の川

人声の中を流れて川涼し

備中の辻堂に夕涼みかな

おはぐろに毬つきの音続きをり

出水川安芸と周防を隔てけり

熱帯夜明ければ空に残る月

山鳩の鳴いて晩夏の夜明かな

駅を出て左手は木槿並木かな

磴上り境内に着き蟬時雨

蟬の声日が昇るほど増してくる

お隣と違ふ色咲く百日紅

出されたるアイスコーヒー氷鳴る

宵毎に母の衣類を夜濯す

蚊遣火を焚きつつゴミを仕分けたり

生き延びて若きへ語り原爆忌

芝雲の伊吹山に架かり夏の朝

清水汲み水琴窟に注ぎけり

藻の花のながれに己が影映り

川風のほどよく吹いて花擬宝珠

夏館二階に川を見下ろしぬ

五月晴旅は終りと鶯の鳴く

真夜の窓ぼつりと夏の月上る

夏風邪の一人の部屋の広きかな

荒梅雨に樟も櫓も打たれをり

はたた神蓀突く雨を帰りけり

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

耳立てて蓮の開花をじつと待つ

県境の流れの清し令歎の花

手花火を皆んなで持ちて終りとす

吾が前を行ったり来たり鬼やんま

坂道の木蔭に聞いてつくつくし

畦道を歩めば蟋蟀つぎつぎに

洗ひ物干して止まりぬ赤とんぼ

空澄むや水車ゆつくり回りをり

どんぐりを踏む音びしり石畳

秋潮のしづかに上る河口かな

あざみ

大学の廊下に迷ふ梅雨曇

梅雨明けの蝶々が前を横切りぬ

療院のブロック塀に草茂る

ガレージの屋根より垂れて青葡萄

七月の蜻蛉空へと飛びゆけり

電線に沿うて歩いて日の盛り

全開のままの温室夏の風

夏のタハープ奏づるしやばん玉

マスクメロンつるの切り口に生の見え

その影に立てば揺れたる青楓

亜矢

初蟬を患者に伝ふるたのしさや

ずぶ濡れの勤労者なり蓮の花

積ん読に我もなりたし夏の星

目標をひとつ叶へて夕焼かな

この峠越ゆればいつも蟬涼し

如何様に生きるもよろし鰻食ふ

我が町の漁師漕ぎ出す祭船

水球の海神のごと現るる

ナイターの万の団扇の揺れてをり

夜遊びの香水匂ふ歩道橋

綾乃

前山の岩端見えぬ茂かな

朝練に行く子ら通り蟬時雨

夏の夜犬の寝言に目覚めたる

露天湯の我を離れず系蜻蛉

谷川の音の澄みたる湯来の夏

風鈴の音色重なる寺苑かな

蓮の葉の雨をこぼして直りたる

夏蝶を猫の捕らへて放しけり

軒下の子燕を聞く飯屋かな

窓開きわつと入り来る蟬の声

墓参して釣り人となる海辺かな

秋の蚊を躊躇ひもなく叩きけり

唐黍と水一杯の夕餉かな

台風やいつもは童遊ぶ川

バス停にむすび頬張る休暇明

図書館に馴染みの顔や休暇明

川風に蜻蛉並びて浮かびたる

色鳥や一息入るる川の端

満ち潮の遡りたる秋の川

秋祭塵も余韻も意かりけり

留守の間に小さき薔薇の咲いてをり

青空に百日白の伸びやかに

夏蝶のひらひらと飛ぶ青い空

夏の庭山鳩の声聞こえけり

縁側で祖母に習ひし螢籠

裏庭の蝉しぐれ聞く日暮かな

枝先に空蟬とまる哀しさよ

浜木綿の白蝶のごと咲きにけり

浜木綿の種を拾ひし土佐の海

野分かな車寿を迎へ兄遊きぬ

井藤希

栄吉

大畑恵

熱帯夜庭に猫の目また光り

自由研究の朝顔盛り過ぎにけり

花カンナ瀬音に近き峽の家

葡萄切る音のしてゐる朝かな

図書館へバス乗り継いで稲の花

岩礁へ寄せては崩れ秋の波

早稲実る峽に雨雲まだ残り

瀬を渡り大文字早咲く道へ

村の灯のつましきかな天の川

秋めける目に届きたる旅案内

暁子

向日葵の咲く路地に立つ道しるべ

旅の宿寝返り打てば早星

萱草の咲く道通り生家に来

グラジオラス母の畑を囲みたり

景の裏の棘の痛さや胡瓜掬ぐ

檜扇は子どもの頃もここにあり

宮の礎登つて仰ぐ雲の峰

初秋や家と木の影濃くなりぬ

開け放つ生家の居間に鬼やんま

真夜中に目覚め見てゐる流れ星

すみれ

母が子に水筒渡す大暑かな

泉湧くあたりに朝の光差す

自転車の友が手を振る月涼し

流木に夫と座して星涼し

寝つかれずカーテン越しの夏の月

音もなく細波寄する今朝の秋

新しき駅に木の香や秋涼し

台風の近づく朝鴉鳴く

飛ぶ鳥の影の早さや秋の川

行き交ひて合図する船天高し

知佳子

伽羅路を友に習ひて作りをり

小流れを歩いて上る水遊び

プランターに水やりながら水遊び

お気に入りの花の刺繍の日傘なり

今年また母と着物の土用干

真夜中に目が覚め蟬を聞いてをり

草茂る母は施設に暮らしけり

向日葵をベットの母が見てをりぬ

母の畑桔梗倒れて咲いてをり

母の部屋に桔梗を生けて帰りけり

ちどり

夏みかん酸っぱし今さら喧嘩など

夏雲や居ると信じる異星人

炎天下歩いて辿る一揆の地

草を食む阿蘇の赤牛雲の峰

阿蘇五岳秋めく雲の流れけり

猪独活の咲きけり雨後の草千里

蛸や独りで浸かる露天風呂

かなかなや湯宿の浴衣ゆるく着て

台風の時青空に闘ぎ合ふ

朝顔や手芸達者を母であり

辻純江

滝音に足を止めたり山の道

聞こゆるは滝音のみぞ山の中

夏の月に守られてゐる散歩道

静けさよ石見の宿に螢舞ひ

草茂る傍を列車の通り過ぐ

大山の夏野に両手広げけり

夏の雨家への坂に息の切れ

月下美人咲いたと友を招きたる

涼風に風船葛ゆれてをり

大花火白寿の父が茶を淹るる

雲雀

香水の変わった洗濯物となる

避暑の波砂の流れる足の指

海水着浅き浜にも濡れる波

日焼けして美しき魚ほど追えば

この島の道は一本夏の海

夕焼けの球場オペラ音鳴す

夏の雨ホームランの粒となる

散らかして空き缶に差す花火かな

寝返りのさなかに法師蟬じくじく

残暑にてエンジン切る松の下

ふじ女

数十秒初蟬細く細く鳴く

入道雲そこから風の生まるるか

いかづちやヒマラヤ杉のどんと立ち

消毒をしすぎる父の百日紅

昼寝覚もぬけの殻の子の布団

帰省子の春に生まれし子を連れて

五百キロ西へ西へと帰省の子

帰省子の笑ひ皺増え父となる

羽抜鶏田舎の道に出てゐるたる

踏切の音に落ちたる白木槿

松田裕子

渡したる薬に朝霧かかりけり

青田風水車の音の聞こえる

溜りの水輪が雲の影揺らす

境内へくぐる山門蟬じくじく

隊長はいつも兄なり捕虫網

父と行くテーマパークや夏休み

昼寝覚たちまち夢の途切れたる

潮止まり浮子を見てゐる炎天下

月涼し波間に揺るる電気浮子

遊きし子の部屋そのままに秋海棠

森口良樹

南瓜の駐車場まで伸びてをり

百日紅ここらは昔処刑場

自転車の並ぶ園庭大西日

朝曇川面へ消火訓練す

蟹の子の山水伝ふ安芸小富士

白波の崩れて匂ふ土用かな

古書店に天文図買ふ夕焼かな

終電の棚に向日葵忘れられ

同級生見つけ輪に入る踊かな

山野ウタ

初蟬やまだ濡れてゐる松の幹

目覚むればどつと聞こゆる蟬の声

雨去つて空蟬しかと残りけり

秋立つや窓に差し込む夜半の月

今朝の秋空一面の千切れ雲

色鳥や瀬音に沿へる登山道

大原良子

炎天の橋より原爆ドーム見る

盛りなり橋の袂の夾竹桃

パジャマ着る前に並んで天瓜粉

玻璃越しの海月の行方定まらず

蟬の声聞こえぬ今朝の散歩かな

仰向けの蟬の真上の空青し

撫子

桃の実のうまく剥けたと母笑ふ

元気でと残暑見舞の筆強く

長居して食後の葡萄呼ばれをり

鶺鴒に轢かれんさんなど声掛ける

水鳥の一羽中洲に留まれり

上島康子

梅干しを躊躇つてゐる天気かな

冷さうめんガラスの皿に大盛に

完熟のトマトも係へてクール便

土間広し鼠花火の駆け回る

紫苑切り仏花としたる昔かな

紀英子

祭かな櫓の音揃ふ伝馬船

油照り臨時に停まる競艇場

炎天やバス乗る人の父に似て

トマト握ぎ胸にあつめて運びをり

ひとつ咲く虎尾草に雨強くなる

桑門わかこ

夏場所の満員御礼嬉しくて

雷と飛行機の音紛らはし

何事もなかったやうに青田波

揚花火真黒き空に木霊する

七夕の懐かしき歌口遊ぶ

須美れい

蜘蛛の囀の万華鏡めく朝日かな

おむすびの塩をきかせて酷暑越す

炎天下誰も遊ばぬ滑り台

流灯のゆるりと回り流れゆく

盆明けの人の溢るるホームかな

友岡葉山子

栗の花二軒先より匂ひ来る

雨上がり裏山に聞く蟬時雨

百日紅板塀越しに枝を伸べ

丸茄子の二つを焼いて夫を待つ

友からの便りに萩の挿絵あり

美耶

百日草三種の蝶の飛び交ひぬ

坂道に汗びつしよりの孫帰宅

入道雲かみなり遠く聞こえる

目覚めればつくつく法師鳴いてをり

河原静子

天よりのオルガンの音堂涼し

古里の猛暑の町を子と歩く

筑紫より家に戻れば蟬の声

朝顔の種の一粒子より受く

高嶋絹代

父の日に入籍知らず便り来る

ていねいに玄関を掃き梅雨の明け

花石榴絵の先生の庭に咲く

電柱の根元に根付き青薄

みさ子

螢籠吊るして待てる夕べかな

片蔭を譲り合ひたるシルバーカー

汗拭いて次の家へと配達士

鳴る鐘の数を数へて夕端居

村上理江

青荻の枝のしなりて蕾付け

白百合の見送るごとし高速道

曾孫をこはこはと抱く盆の宵

金川昭子

青嶺より人の下り来る大山寺

青嶺より吹き来る風を身に受くる

ジグザグに坂道上る秋暑かな

熊谷ゆり子

校線に入道雲の立ち上がる

百日紅枝光の花風に揺れ

石段のプランターには彼岸花

民

令和五年七月度作品集より

亜矢 私の選んだ十句

安芸に入り古墳続くや青嵐	佐保光俊
川に出て一途に飛べる夏燕	井藤希
古団扇五右衛門風呂の傍らに	栄吉
蛩狩歩き慣れたる道の闇	暁子
夏至の雨何するとなく一日過ぐ	辻純江
暑がりと寒がりの居て扇風機	松田裕子
風炉点前湯の沸く音に正座して	村上理江
蚊遣香はさみ将棋の続きをり	高梨英子
風鈴の鳴る改札に降り立ちぬ	熊谷ゆり子
時計草ゆらりゆらりと影の揺れ	美耶

暁子 私の選んだ十句

弔ひの家に飛び来て夏の蝶	佐保光俊
寝転べばまた五月雨の音のする	高尾ひとみ
ほうほうと牛を呼ぶ声大夕焼	あざみ
甘藍に台たわみたる土佐の市	綾乃
分水嶺越して味はふ夏料理	栄吉
惑星にそれぞれ軌道送り梅雨	辻純江
喧嘩して摺りつけをり山椒の実	雲雀
アンカーのバク転打つて夏の空	松田裕子
風鈴の鳴る改札に降り立ちぬ	熊谷ゆり子
桑の実に雀の口の紅きかな	上島康子